

# Mark Twain の “hell-fire”

—— *Pudd'nhead Wilson* における Roxana の描写を中心に ——

山 本 祐 子

## 序

*Pudd'nhead Wilson*<sup>1)</sup>における Roxana は、Twain が描く女性達の中でもっとも印象深く、人間味あふれる一人とされていることは言うまでもない。彼女は15/16まで白人の血を引きながら黒人奴隷として迫害されていた悲劇的な女性であり、その悲劇的な女性が赤ん坊の息子を命がけで守ろうとする姿は感動的でもある。しかしその一方で Roxana は白人優位の価値観に染まっているかと思えば、白人達を利用して金儲けしようとしたり、息子や白人達への積年の怨みをあらわにする恐ろしい面もあった。このように矛盾に満ちた Roxana 像は、これまで批評家達の間で、擁護あるいは批判の両面において様々な議論を呼んできた。<sup>2)</sup> なかでも特筆すべきなのは、Arthur G. Pettit の “The Black and White Curse” である。Pettit は、“all-white Southern belle”, “tragic mother figure” あるいは “black shrew” と絶えず変容していく Roxana の側面を一つ一つたどっていくことで、Twain が “skin color” と “miscegenation” に対して抱えていた幾重にも入り混じる混沌とした問題意識を解きほごそうとした。

しかしこうした批評はいずれも Roxana の性格や行動を論じることに終始し、Roxana がどのような表現を用いて描かれているかについて着目するものはなかった。しかし Roxana の描かれ方を詳細に考察すると、絶えず変容していく Roxana 像とは異なり、一貫して “fire” “flame” “conflagration” といった「火」や「炎」を連想させるのが分かる。そこ

で本論ではとりわけ “hell-fire” をキーワードとして Roxana の描写に込められた象徴的意味を読み取っていきたい。そして象徴的意味という新たな視点を通して見ることで、変容するかのように見える Roxana 像には一貫した重要な意義が込められていることを明らかとしたい。

I

*Pudd'nhead Wilson* は、舞台となる Dawson's Landing の概観を紹介するところから始まる。Dawson's Landing は、つつましいながらも、穏やかで心地よさげな家々が集まる小さな村であった。どの家も美しく咲き誇る花々に囲まれていて、窓辺には猫がまどろんでいた。こうした美しい家々を見れば、この村の住民がいかに満ち足りた平和な家庭を築き上げていたかが分かる、と語り手は言う。しかしこうした言葉とは裏腹に、語り手は次のようにも付け加えるのだ。

... while on the window-sills of the houses stood wooden boxes containing moss-rose plants and terra cotta pots in which grew a breed of geranium whose spread of intensely red blossoms accented the prevailing pink tint of the rose-clad house-front like an explosion of flame. (3) [以後、下線は筆者]

窓辺において “pink” の花々を背景に “intensely red” のゼラニウムが咲き誇る様子はまるで “an explosion of flame” のごとく見えたと言う。その光景は、一見平和そうな家々の窓から恐ろしげな “flame” が噴き出しているようにも見えてくる。そしてこの不吉な “flame”こそは、Dawson's Landing の裏側で苦悩する奴隷達、とりわけ Roxana にまつわっていることが、次章以降で明らかとされる。なぜならそこで Roxana は、まさに “flame” に包まれ焼かれるがごとき姿を読者の前に表すからだ。

第2章では Percy Driscoll が家の中で僅かな金を盗まれたことに気づき、Roxana ら奴隷達を集めて問いただした。そして盗みを白状しなければ、奴隷達を全員川下に売り飛ばすと宣告したのである。それはまさに、“condemning them (niggers) to hell” (12) するのも同じであったと言う。なぜなら川下の農園では、死ぬよりもつらい重労働と責め苦が待ち構えていたからだ (81)。ここ奴隷制社会の Dawson’s Landing では白人が絶対的な “a god” (12) のごとく君臨していて、まるで罪人を地獄へ突き落とすかのように、奴隷達を川下という現世の “hell” へ放りこんでいったことをほのめかしていた。<sup>3)</sup>

このとき Roxana はなんとか川下に売られずに済んだ。しかしその夜 Roxana は、赤ん坊の息子を抱いて狂ったように嘆き苦しみ出すのだ。なぜなら彼女の息子は、村の有力者 Colonel Cecil Burleigh Essex との間でできた子供であり、外見は白人と全く変わらなかった。それでも彼女の息子はあくまで奴隷であり、いつかは川下という “hell” へ売られる運命を背負っていたことを、Roxana は今度の事件で思い知らされたからである。

そこで Roxana は息子のため親子で心中しようと思いつめ、死出の装いを整い始めたのである。こうしてまとったドレスこそが “a cheap curtain-calico thing, a conflagration of gaudy colors and fantastic figures” (13) であり、ギラギラ輝く色合いが途方もない模様とまじりあって「大火」のごとく見えたのである。彼女はこの “conflagration” のようなドレスを身にまとうと、次のように身をやつしていった。

She took off her handkerchief-turban and dressed her glossy wealth of hair “like white folks;” she added some odds and ends of rather lurid ribbon and a spray of atrocious artificial flowers; finally, she threw over her shoulders a fluffy thing called a “cloud” in that day, which was of a blazing red complexion. Then she was ready for the tomb.

She gathered up her baby once more: but when her eye fell upon its miserably short little gray tow-linen shirt and noted the contrast between its pauper shabbiness and her own volcanic irruption of infernal splendors, her mother-heart was touched, and she was ashamed. (13)

Roxana は第 1 章で “rosy glow of vigorous health in the cheek, . . . her eyes were brown and liquid, and she had a heavy suit of fine soft hair which was also brown” (8) と紹介されている。Roxana は赤みを帯びた “brown” の髪をあらわすと、その髪色に合った “lurid ribbon” を添えたのである。そして彼女は先にまとった “conflagration” のようなドレスのうえから、“blazing red” のショールを肩に羽織ったのだ。このように彼女は頭から足元までまるで燃え上がる炎のような色合いに染まり、その姿は “volcanic irruption of infernal splendors” とまるで火山噴火を起こして体全体が「地獄の火」に包まれているかのように見えたのである。

というのも “volcanic irruption of infernal splendors” の “infernal” は、一般に “hell 「地獄」” の同義語として用いられている。キリスト教では、罪人は死ぬとここで “infernal fire” すなわち “hell-fire 「地獄の火」”<sup>4)</sup> に焼かれ永遠の罰責を受けると言われているのだ。それゆえ Roxana の姿が “volcanic irruption of infernal splendors” に喩えられ、まさに恐ろしい炎に包まれるかのように赤々と染まる有様は、キリスト教の罪人が “hell-fire” で焼かれているかのようにも見える。実は Twain は、これと似た人間の姿を Hawaii の Kilauea 火山において実際に目にしている、その様子を *Roughing It* (1872) において次のように描いている。

Arrived at the little thatched lookout house, we rested our elbows on the railing in front and looked abroad over the wide crater and down over the sheer precipice at the seething fires beneath us. . . .

I turned to see the effect on the balance of the company and found the reddest-faced set of men I almost ever saw. In the strong light every countenance glowed like red-hot iron, every shoulder was suffused with crimson and shaded rearward into dingy, shapeless obscurity. The place below looked like the infernal regions and these men like half-cooled devils just come up on a furlough. (534)

火山のクレーターをのぞきこむと “volcanic irruption” (297) がいまだに続き、恐ろしい “fires” が一面に波打っていた。それゆえクレーターをのぞきこんでいた人間達は、火山の強烈な “fires” に照らされて全身燃えているような色合いに染まっていたと言う。このとき Twain には、クレーターの底がまるで “the infernal regions” すなわち “hell” そのものに見え、それゆえ傍らに立つ人間達はまさに “hell-fire” で焼かれていた悪魔たちのように見えたのである。

こうした火山における特異な光景と同じく、Roxana の姿も “volcanic irruption of infernal splendors” と形容され、まさに “hell-fire” で焼かれる罪人を想起させてくる。そしてこうした姿を表したことで、Roxana はかつて聞いた黒人牧師の言葉を思い起こすのだ。

He said dey ain't nobody kin save his own self - can't do it by faith, can't do it by works, can't do it no way at all. Free grace is de *on'y* way, en dat don't come fum nobody but jis' de Lord; en *He* kin give it to anybody He please, saint or sinner - *He* don't k'yer. He do jis' as He' a mineter. He s'lect out anybody dat suit Him, en put another one in his place, en make de fust one happy forever en leave t'other one to burn wid Satan. De preacher said it was jist like dey done in Englan' one time, long time ago. . . . de preacher said it his own self, en it ain't not sin, caze white folks done it. *Dey*

done it - yes, dey done it. . . (15)

New Testament の Rev. によると、もともと “hell-fire” は神に謀反した “Satan” らを罰するために用意されたものである。そのため罪人は死ぬと、“Satan” とともに “hell-fire” で焼かれて「昼も夜も世々限りなく責めさいなまれる」(20:10) こととなる。<sup>5)</sup> しかし黒人牧師の解釈によると、主 (“Lord”) は聖人・罪人の区別なく気に入ったものを選び出しては、その人間にだけ恩寵を与えていつまでも幸福に暮らせるようにしてやると言う。そして選び出された者がもといた場所には別の人間を置き換えて、その人間が “burn wid Satan” しても、すなわち “hell-fire” で焼かれ「昼も夜も世々限りなく責めさいなまれ」ても、気に留めないで放っておくと言うのである。しかもこれと似たようなことを白人達もやってきた、と黒人牧師は言う。

なぜなら先述したように、Dawson’s Landing における白人達はまさに主の祝福を受けた選ばれし民と奢り、ついには “a god” のごとく振るまい、奴隷達を罪人・聖人問わず気の向くままに川下という現世の “hell” に送りこんでいったのだ。そして白人達は奴隷がそこで “burn wid Satan” するがごとく責苦を味合うこととなろうとも、気に留めるものなど誰一人いなかったのである。<sup>6)</sup> こうしたことを考え合わせると、Roxana が “volcanic irruption of infernal splendors” とまるで “hell-fire” で焼かれているかのような姿を表したのは、白人達が選民と奢り “a god” のごとく君臨する一方で、彼女のような奴隷は “hell” へ突き落とされ “burn wid Satan” するがごとく苦しむ運命にあったことを象徴的に表すためであったことが分かるはずだ。

そこで Roxana は黒人牧師の言葉を思い返しつつ、自分の息子と主人の息子を取り替えようと決意する。そして取りかえられた子供が奴隷として川下に売られ、地獄の苦しみを味わうことになろうとも気に留める必要はないと自分に言い聞かせた。なぜなら「それこそ白人達もやってきたこ

となのだから、罪ではないのだ (“it ain’t not sin, caze white folks done it. Dey done it—yes, dey done it.)」と。こうして Roxana の息子は、悲惨な奴隷から一転して、裕福な白人の息子 Tom として恵まれた生活を送ることになる。その様子が、第 5 章では皮肉を込めて描き出されている。そこでは偽 Tom が 19 歳になり、東部風の洒落た装いと優雅な態度を身につけて、自慢げに町を練り歩くようになっていた。するとそれに嫉妬し苛立った村の若者達が、次のようないたずらを仕掛けて偽 Tom をからかったのである。

... when Tom started out on his parade next morning he found the old deformed negro bellringer straddling along in his wake tricked out in a flamboyant curtain-calico exaggeration of his finery, and imitating his fancy eastern graces as well as he could.  
(24)

偽 Tom の後ろから、偽 Tom の装いや仕草を大げさに真似て歩く黒人が影のようについてくる。これは一見滑稽に映るが、年老いた奴隷は “flameboyant” な装いで身を包み、全身 “flame” に包まれているようにも見える。すなわち偽 Tom が豪華な装いに身を包み恵まれた姿とは対照的に、哀れな奴隷は “flame” に包まれるかのような姿をあらわした。ここには黒人牧師の喩えどおり、主の恩寵を受けた幸運な者と、“hell” に突き落とされ “burn wid Satan” するがごとく過酷な運命を背負わされた者が並び表されているのだ。

以上のように見ていくと、白人達が選民と奢り “a god” のごとく振舞う影で、Roxana のような奴隷達が犠牲となって苦しんでいたことが分かる。そればかりか Roxana は、この選民と信じる白人達を脅かす存在と

して、憎悪の対象とすらなっていくことになる。

というのも偽 Tom は白人として成長すると、乳母として仕えていた Roxana を“nigger wench and hussy” (22) と呼んでは蔑み、虐待たのである。Victor Doyno によると、“the term “wench” could have implied in many parts of the South, at the time, that she had been used for breeding purposes.” (380) としている。この言葉どおり、Roxana の祖先は代々白人男性の子供を産む役割を担わされ、彼女もまた白人男性の子供を産まされていた。そして偽 Tom の態度から、こうした役割を負わされた女性“nigger wench”に対して、白人達が侮蔑だけでなく、激しい憎悪の念を浴びせていたことが伺え知れる。例えば第18章では農園主が“nigger wench”である Roxana に関心を示したことで、彼の妻は Roxana に嫉妬し憎むようになり、激しい虐待までするようになったのである。

確かに当時の白人男性は身勝手な欲望から黒人女性に子供を産ませてきた。そのために混血が進み、白人と黒人を隔てる境界線がぼやけてくる恐れがでてきていたのである。黒人と白人の融合は、白人だけの優れた社会を崩壊させると恐れられた。それゆえ Roxana のような魅力的な“nigger wench”は、白人男性にみだらな罪を犯させ、白人社会を崩壊へと導く恐ろしい女と映ったに違いない。すなわち白人達は自らが犯してきた罪と、それによってもたらされた恐怖を全て Roxana に転嫁し、憎悪したのである。

とはいえ Roxana が奴隷である自分の息子と主人の息子を取り替えてしまったことで、彼女が白人社会の秩序を根底から揺り動かし、それは確かである。また Roxana は、白人社会に送りこんだ息子・偽 Tom を通じて白人達への恨みを晴らそうとし、社会に混乱をもたらし、彼女には白人優位の価値観が染み付いていたし、白人社会の転覆をもくろんでいたわけではない。しかし白人達が生み出し、抑圧してきた Roxana という存在そのものが、本人も知らぬ間に白人社会の脅威となっていくことを読者は読み取っていくはずだ。



つまり第3章において Roxana がまるで “hell-fire” で焼かれるがごとく赤々と燃え立つ姿を表したのは、“hell” へと突き落とされるがごとき苦悩の人生を暗示すると同時に、中世ヨーロッパで魔女に仕立て上げられた女性達のように、支配者側の罪悪と恐怖心の転嫁対象となり、火炙りにされるがごとき憎悪と迫害を一心にうけることを暗示していたのである。<sup>7)</sup>

このように “hell-fire” で火炙りにされるかのような姿を通して予兆された Roxana の末路は、物語の後半において明らかとされる。それは、Roxana が皮肉なことに息子である偽 Tom にだまされて川下の農園へと奴隷として売られたことから始まる。川下の農園は奴隷達にとっては “hell” と同じであると述べたが、Roxana は実際にこの “hell” へと突き落とされてしまうのだ。しかもそこでは、前述したように農場主が “nigger wench” である Roxana に好意を示したことで、彼の妻は Roxana に嫉妬し憎むようになる。農園主の妻にとって、Roxana は家庭の平安を乱す脅威と映ったに違いない。彼女は Roxana に過酷な畑仕事へつかせると、食事もろくに与えず一日中働かせた。また白人の監督に命じて、Roxana をことあるごとに鞭打たせ徐々に弱らせていったのである。このように「地獄」のような日々が続く、Roxana はもはや長く生きられないと悟っていたとき、ある黒人の少女が Roxana のために盗んできたジャガイモをこっそり渡そうとしたのである。この少女は Roxana を母親のように慕っていたのだ。しかしそれを白人の監督が見咎め、黒人の少女を太い棒で殴り倒したのである。そのときの様子を Roxana は次のように語っている。

en he ketched her at it, en give her a lick acrost de back wid his stick which ‘us as thick as a broom-han’le, en she drop’ screamin’ on de groun’, en squirmin’ en wallerin’ aroun’ in de dust like a spider dat’s got crippled. I couldn’t stan’ it. All de hell-fire dat ’uz ever in my heart flame’ up, en I snatch de stick outen his han’ en

laid him flat. (86)

Roxana は奴隷であるだけでなく、女性であったがために憎悪と恐怖の対象となり、まさに“hell-fire”で火炙りにされるがごとき責め苦を受けたのである。それでも、いやだからこそ Roxana は白人達の憎悪と恐怖の“hell-fire”をさらに燃え立たせるがごとく、絶対であるべき白人に歯向かい打ちのめしてしまうのである。その様子は、第8章において Roxana が偽 Tom に“nigger wench and hussy”と憎まれ虐げられてきたがゆえに、“the fires of her old wrongs flamed up in her breast and began to burn fiercely.” (38) となり、おもわず偽 Tom に逆らい怒りをぶつける場面を思い起こさせる。

だがここで Roxana は白人に歯向かったことで、さらなる激しい憎悪と迫害を受けると悟り、死に場所をもとめて農園から逃げ出すこととなる。その後、彼女は運良く逃げ延びることができたため、復讐の一念で偽 Tom のいる町へとやってきた。しかし彼女が偽 Tom の前に姿を表したとき、“It rained all day long, and rained hard, apparently trying its best to wash that soot-blackened town white, but of course not succeeding.” (84) と町全体は汚れきって“black”にすすけていたと言う。そうした“black”の暗がり中から、Roxana は“a wreck of shabby old clothes sodden with rain and all a-drip, and showed a black face under an old slouch hat.” (84) と、黒炭で顔を“black”に染め、不気味で恐ろしい姿で偽 Tom の前に現れたのである。言いかえれば彼女はこのときもはや精も根も尽き果て、まるで“hell-fire”で焼き尽くされ、“black”に焼き焦がれたかのような姿となっていたのだ。

ところが Roxana は帽子を取ると、そこからぼさぼさだが肩まで垂れる艶やかで豊かな“brown”の髪をあらわしたのだ。それを見た偽 Tom は思わず息をのんでしまう。なぜならこの美しい“brown”の髪は“black”に焼け焦げたような Roxana の醜い姿とあまりに不釣り合いで、それゆえ

一層異様に映ったからである。だが燃えるような “brown” の髪だけは、魅力的であった頃の Roxana の姿をとどめ、白人社会の恐怖と憎悪の対象となっていた頃を思い出させた。そこには彼女がいまだ、白人社会への脅威となりえることを暗にほのめかしていたのである。現実には彼女は弱々しいながらも偽 Tom を脅し、自分を川下へ売り飛ばした償いをさせようとした。そしてそのことが Dawson’s Landing の支配者であり、秩序の番人であった Judge Driscoll の殺害へと偽 Tom を駆りたて、白人社会を大きく揺るがすこととなるからだ。

しかし物語の終わりで偽 Tom の殺人と出生の秘密が暴かれて、Roxana が取りかえた奴隷と白人の息子は本来の場所へ戻され、白人だけの特権社会が再びとり戻される。すると “the spirit in her eye was quenched, her martial bearing departed with it, and the voice of her laughter ceased in the land.” (114) と Roxana の目から情熱の輝きは「火が消える」ように消え去り、それとともに彼女の活力ある仕草や笑い声も消え去ってしまう。こうして Roxana は文字通り火が消えたようになり、もはや社会の脅威ではなく、恐怖と憎悪の対象ですら無くなったことをほのめかして物語は閉じるのである。

このように見ていくと、Roxana はまるで “hell-fire” で火炙りにされているかのような姿で登場し、最後には “hell-fire” で焼き尽くされ、火が消えたようになって物語は閉じられる。そこには、Roxana が白人達に抑圧され、子供まで産んでいたことがかえって白人達の脅威となり、白人達から燃え滾る恐怖と憎悪の念を一身に浴びせられていたことを象徴的に表していたのだ。また Roxana は “a god” のごとき白人達を脅かすとして、“Satan” の手下か魔女が火炙りにされる姿をイメージして描き出されていたのは明らかである。しかしそこにこそ、Twain 流の最大の皮肉が込められていたのである。そのことについては、Twain が若い頃より抱いていた美意識について探ることで明らかとなっていく。

Twain は若い頃 “red hair” (正確には “auburn hair”) をしていたのだが, “red hair” といえは悪魔や “Satan” のものとされ, 不吉とすら言われることもあった (フリース, 304)。しかも Twain が関心を寄せていた骨相学において, “red hair” は “signs of fire” であり, “buring, flaming, flashing temperament” を表していると言う (*Early Tales & Sketches*, 445)。しかし Twain は, この “Satan” を思わず燃え立つような “red hair” を誇りとしていたというのである (*Early Tales & Sketches*, 102)。それゆえ Twain は1853年に “Oh, She Has a Red Head” という興味深い記事を書いて, “red hair” に対する社会の偏見に真っ向から反論している。そのなかで Twain は “A Son of Adam” と名乗り, “red”こそはこの世で最も汚れなき美しさだと訴え, 最後にこう付け加えている。

... although it is not stated in so many words, I have but little doubt that Adam's hair was red—for he was made of “red earth” (as his name indicates), and as the name “Adam” was given to him *after* he was made, it is pretty clear he must have had red hair! And the great probability is that Eve's hair was red also . . .

Now, Adam and Eve before they sinned, are generally supposed to have been the most lovely and beautiful of creation, and they, in all probability were both “red headed.”

But you, O ye deteriorated black headed descendants of an illustrious stock! have no more taste than to glory in the evidence of your departure from original beauty! I'm ashamed of you; I don't know but you'll repudiate your ancestry, and deny you are descended from Adam next.

A SON OF ADAM. (105)

Adamは“red earth”で造られたのだから“red hair”であったはずだと、Twainは説くのだ。こうしてTwainの“red hair”はAdamから受け継がれたものであり、自分こそは正真正銘の“A Son of Adam”であると暗に訴えるのだ。当時Adamは黒髪をしていたと考えられていたことから、<sup>8)</sup> 黒髪をしていたTwainの友人が自分の髪を誇らしげにたなびかせては、Twainの“red hair”をからかっていたようである。しかしTwainは、“Satan”を表すとされた“red hair”こそ聖なる証しであり、奢る黒髪の者達こそ実はAdamの持っていた本来の美しさから遠ざかり、醜く墮落していることに気づきもしない冒涇者だとやり返している。

このようにしてTwainは、“red hair”が不吉な“Satan”を、“black hair”が聖なる“Adam”をあらわすという社会の見方が容易に逆転してしまうことをほのめかす。こうした逆転を通して、自分達こそは模範的なキリスト教徒だと信じこみ奢る者たちが、実は見方を変えれば罪深く、最も墮落した存在に見える皮肉なのだ。

Twainが“red hair”のほうがか実は美しく尊いと論じたように、Roxanaが“hell-fire”で焼かれるがごとく憎まれ恐れられる姿は見方を変えれば、彼女が白人男性にとって魅力的で無視しがたい存在であったことの証でもあった。すると選民と奢り“a god”のごとくDawson’s Landingを支配してきた白人達こそ、実は奴隷達を苦しめる悪魔のごとき醜い姿に見える。実際に“the god of this world”といえ、一般に“Satan”を意味する。こうして物語では白人の息子と奴隷の息子が容易に取りかえられたように、白人が“a god”のごとく聖なるものでRoxanaは火炙りの魔女を思わず不吉な存在という立場は容易に逆転し、取りかえられることをもほのめかしていたのだ。

Twainは*Pudd'nhead Wilson*の完成直後から、歴史小説*Personal Recollections of Joan of Arc* (1896)の執筆に取り掛かる。そこで扱われるJoan of Arcは、まさに魔女として火炙りにされながら、後に聖女と

して人々の熱狂的な崇拜を集めるようになった女性である。キリスト教社会では魔女と聖女は表裏一体をなし、時代や見る者が変わるだけでその称号は容易に取りかえられてしまうことに、Twain は強い関心を抱くようになっていたに違いない。Roxana もまた、Dawson's Landing というキリスト教社会では魔女のごとく忌み嫌われ迫害されていたことが象徴的に表されていた。だが彼女の姿は時代と視点が変われば聖女となりうることも、Twain は同時に示唆していたのだ。火炙りの魔女と重ねあわせられた Roxana 象を通して、Roxana の姿を映し出す白人達のキリスト教社会がいかに欺瞞と偏見に満ちていて、かついかに不安定な世界であったかを訴え、白人達に警告を發したのである。

#### Notes

- 1) 以後この書からの引用は *Pudd'nhead Wilson and Those Extraordinary Twins* (1980) からとし、引用文の末尾には (頁数) のみを付記する。
- 2) 詳細は、Carolyn Porter の “Roxana's Plot” および、*Pudd'nhead Wilson and Those Extraordinary Twins* (1980) に収録された “Critical Essays” を参照。
- 3) Percy Driscoll は、盗みを告白した奴隷達を川下ではなく近隣に売ること勸弁してやると言ったことで、*“like a god he had stretched forth his mighty hand and closed the gates of hell against them. He knew, himself, that he had done a noble and gracious thing, and he was privately well pleased with his magnanimity . . .”* (12) したと語られている。ここでは、Percy Driscoll が明らかに “a god” に喩えて描かれていることが分かる。
- 4) *The Holy Bible: A Reprint of The Edition of 1611* では、「地獄の火」にあたる言葉は “unquenchable fire” (Matt. 3.12), “hell fire” (Matt. 5.22, 18.9), “everlasting fire” (Matt. 18.8, 25.41), “lake of fire” (Rev. 20.14) などと複数ある。しかし本論では、Twain が *Pudd'nhead Wilson* で用いている “hell-fire” (86) という言葉で統一する。
- 5) その他に、Matt. 26.41を参照。
- 6) *Pudd'nhead Wilson* の “Emendations of the Copy-Text: Substantives” によると、Twain は当初の原稿で “suffer” という言葉を用いていたところを、後に

“burn wid Satan”という言葉に書き換えていることが分かる (183)。このことから、Twain が “burn wid Satan” という言葉を思量の上で使っていたことが伺える。

- 7) 中世ヨーロッパの魔女狩りについては、池上俊一『魔女と聖女』(1992)を参考とした。
- 8) “Extract from Adam’s Diary” (1904) では Cain が赤毛で、Adam が黒髪であることに触れている。

### Works Cited

- Doyno, Victor. Textual Addendum. *Adventures of Huckleberry Finn*. By Mark Twain. Fawcett Columbine and New York: Ballantine Books, 1997.
- The Holy Bible: A Reprinting of the Edition of 1611*. Introd. Alfred W. Pollard. Oxford: Oxford UP, 1985.
- Pettit, Arthur. “The Black and White Curse: *Pudd’nhead Wilson* and Miscegenation.” *Pudd’nhead Wilson and Those Extraordinary Twins*. Ed. Sidney E. Berger. New York and London: W.W. Norton & Company, 1980.
- Porter, Carolyn. “Roxana’s Plot.” *Mark Twain’s Pudd’nhead Wilson: Race, Conflict, and Culture*. Eds. Susan Gillman and Forrest G. Robinson. Durham and London: Duke UP, 1990.
- Twain, Mark. “Adam’s Diary.” *The Diaries of Adam and Eve*. Ed. Shelley Fisher Fishkin. New York and Oxford: Oxford UP, 1996.
- . *Pudd’nhead Wilson and Those Extraordinary Twins*. Ed. Sidney E. Berger. New York and London: W.W. Norton & Company, 1980.
- . *Roughing It*. Ed. Shelley Fisher Fishkin. New York and Oxford: Oxford UP, 1996.
- . “Oh, She Has a Red Head.” *Early Tales and Sketches Vol 1*. Eds. Edgar Marquess Branch and Robert H. Hirst. Berkeley, Los Angeles and London: U of California P, 1979.
- アト・ド・フリース『イメージ・シンボル事典』大修館書店 1984.
- 池上俊一『魔女と聖女：ヨーロッパ中・近世の女たち』講談社 1992.
- 『聖書 Bible 和英対照：和文／新共同訳 英文／TEV』日本聖書協会 1999.